

大江健三郎「鳩」論

渡邊 静

序論

「鳩」は、昭和三三（一九五八）年三月、『文学界』で発表された短編作品である。

物語は、主要登場人物である少年の「僕」を視点人物として展開される。少年院で暮らす「僕」が、作中「混血」と呼ばれた「院長の養子」の少年を誤って河に転落させ、そこから抱いた罪の意識によって自己を処罰する物語である。

この作品は、他の大江初期作品に共通する枠組みを持っている。この枠組みは大きく三つあり、一つは物語が「僕」という人物による一人称の語りによって展開されるという点、二つ目はその「僕」が社会から疎外された共同体に属しているという点である。

そして三つ目は、「鳩」に登場する「院長の養子」のような、「僕」とは別の共同体から訪れた登場人物と「僕」が関わることで、「僕」が最後には自身の属する共同体から逸脱し孤独な状況に陥っていくという点であり、この構造は、他の大江初期作品である「芽むしり仔撃ち」や「他人の足」にも共通して見られる。

本論では、自己処罰を通じて集団から「個」へと自立を図る「僕」の描かれ方から、「鳩」がこれらの初期作品のパターンを超えた作

品として位置付け、論じていく。

「僕ら」と「僕」では、この物語の舞台となる「少年院」で暮らし、「僕」が「僕ら」として表す、〈個〉の埋没した少年たちの共同体の姿について、そして「院長の養子」である「混血」と呼ばれる少年との関わりについて論じる。

「混血」と「僕」では、「僕」個人と「院長の養子」の少年との関係を通して、鳩のモチーフに着目しながら、「僕」が「僕ら」から逸脱していくあり方を中心に考察していく。

なお、引用した作品の本文テキストは、全て大江健三郎『大江健三郎全作品1』（一九六六年初版・一九七〇年第八刷）新潮社による。

一 先行研究の状況

大江健三郎は「鳩」が収録された『死者の奢り』（文芸春秋、一九五八年三月）の後記の中で、「僕はこれらの作品を一九五七年のほぼ後半に書きました。監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態を考えることが一貫した僕の主題でした」と述べている。

相原和邦氏は「『芽むしり仔撃ち』論——大江健三郎の初期——」『文

学研究』(一九七二年一二月)において、大江初期作品の特色として、「芽むしり仔撃ち」を集大成としながら、「社会的疎外の対象としての感化院が設定される」ものとして「鳩」を位置付けている。

桑原文和氏は「大江健三郎『芽むしり仔撃ち』論——自己」のための戦いを選んだ「僕」——(国語国文研究九二号、一九九二年一二月)の中で、大江初期作品は一貫して語り手の「自己」を作り続けるための戦いであると述べており、共同体から逸脱することと「自己」を確立しようとする構造を指摘する。

二 「僕ら」と「僕」

語り手である「僕」の暮らす「少年院」は、未成年の犯罪者を収容するための施設であり、「僕」はその中の「特に兇悪な者たちを隔離するために作られた仮の分院」で暮らしている。それゆえ彼らは「少年院」の「外」の世界と直接接触することができず、夕方の自由時間に、「少年院」の「壁」の上にある、「有刺鉄線のうずまきを支える木枠」と「コンクリート壁」との狭い隙間から「外」を覗き見ること、「少年院」の「外」の世界である「外部」との接点を持つとする。彼等は夕暮れ時に、「院長」から「自分たちの『罪』を悔いあらためるための反省にあてさせる」ことを目的に自由時間を与えられている。

夕暮れは僕らにとって、きわめて重要な短い時間だった。僕らがあらゆる制約からのがれ、自分の身に微細な塵のようにまといついでいるかざしれない院内規約や法規のすべてを払い落とす、そしてしまうことのできる唯一の機会が、それら河のようにめぐ

るあらゆる季節の夕暮れだったのだ。(傍線論者)

引用傍線部の、「僕らがあらゆる制約からのがれ、自分の身に微細な塵のようにまといついでいるかざしれない院内規約や法規のすべてをはらいおとすことのできる唯一の機会」である夕暮れの自由時間、つまり少年達が一時的に「少年院の少年」という立場が曖昧になる時間に、彼らは院長の迷惑通りにおのれの犯した罪を悔いめるのではなく、そこから見える河に流れこむ家庭用排水を見ることが、「自然の風物の隆盛と衰退とを知る」、つまり少年達は積極的に「外部」を見る事で関わりを持つようとしているのだ。

またその監禁状態にある「僕」や他の「少年院」の少年たちが関係する人物は限定されたものとなる。この物語の中で「僕」に語られる登場人物は、「僕」の所属する「少年院」の仲間達と、そこを経営する「院長夫婦」、少年たちを監督する「教官」、医務室の「看護婦」、「門衛の夫婦」、そして「院長夫婦」の養子であり、「少年院」の少年たちに「混血」と呼ばれた少年である。

「僕」は自身を囲むこの閉じられた環境から、「僕ら」という、「僕」を含めた「少年院」に収容された少年たちの集団意識を持ち、その集団に帰属する。この「僕ら」の間には、さらに三つの勢力に分けられることが「僕」の語りから明らかになる。それは「僕ら」の中でも最も影響力を持つ「兄貴株」と、その「兄貴株」の庇護を受ける「情婦の少年」、そしてそれ以外の、「情婦になるほどの優しい首筋を持たない者たち」と表された少年達である。

夕暮れに僕らはただ黙りこんでさえすればいいのだった。兄貴株の者たちは自分の情婦の少年を傍にひきつけ、彼らほどの勢力を持たず、情婦になるほど優しい首筋を持たない者たちは、

それぞれかたまりあつて黙りこみ、ざらざらする粒だちが人間の手の脂でよごれている壁に背をもたせかけて立ち、あるいは草の細い芽さえ生えていない不毛な地面に腰をおろして膝をしつかりかかえこんでいること、それが僕らの夕暮れに要求されることだった。

この「僕ら」の中で細分化された三つの集団には上下関係が存在し、一番上の立場が「兄貴株」であり、物語中においては「兄貴株」のなかで最も勢力を持っている少年である「海員」と呼ばれる少年が、「兄貴株」の一人として登場する。次に優位なのが「情婦の少年」であり、「兄貴株」に選ばれた彼らは「兄貴株」の少年と性的な関係を結ぶことで彼らを味方につけ、他の少年たちよりも優位性を保っている。この「優しい首筋」といった女性性を強調された身体持ち主の「情婦」の少年は、自身が男性でありながらも強者である「兄貴株」によって女性化され、共同体に組み込まれるのだ。栗原彬氏は「差別の社会理論のために」の中で社会構造について次のように述べている。

社会は、人々をあるカテゴリーで区別して、そのカテゴリーのメンバーにいくつかの属性から構成される社会的アイデンティティを付与する。ある社会的場面で、人々がエンカウンターを行なう際、その場面に適合すると見做されている（仮想枠組み）(virtual frame) が行使されて、非対称的なカテゴリーへの振り分けが進行することに伴ない、タテの権力関係が構成される。^(註1)

(傍線論者)

ここで栗原氏が「ある社会的場面で、人々がエンカウンターを行なう際、その場面に適合すると見做されている（仮想枠組み）(virtual

frame) が行使されて、非対称的なカテゴリーへの振り分けが進行することに伴ない、タテの権力関係が構成される」と指摘するように、少年院という社会から犯罪者という枠組みで形成された少年たちの共同体は、さらにその共同体の中で「強者」と「弱者」、そしてそれに伴い「強者」の証として生み出された「情婦」といった、少年たち独自の「仮想枠組み」を形成し、二重に差別化されたタテ社会を形成しているのである。

物語中では「彼らほどの勢力を持たず、情婦になるほど優しい首筋を持たない者たち」として共同体の最下層に位置付けられている「僕」が「海員」の「情婦の少年」に挑発を受け、彼にとびかかるうとした際、強者である「海員」によって阻止されている。またこの「少年院」の少年達の〈集団の意識〉である「僕ら」は、彼等のいる共同体の中で異質な存在に対し、その人物が持つ〈個人の意識〉としての記憶をその人物自身の話を通して集団のものとして吸収するといった性質を持っている。

①時々新しく入ってきた少年が、自分を臆病な孤独へおとしれ
てしまいそうに思える苛立たしい危惧におそわれて、腕をふり
まわし肩をそびやかせて叫ぶことがある。「おれは男色やろう
とのつきあいだ暮らしてたんだが、脂や 그리스 でも間に合わな
い化物が客になっていいがかりをつけやがった。おれはいつも
上衣の舌に鉛の珠を吊っておいたからな」

②そしてある日、急にその少年は語りやめるのだ。彼の《罪》が
僕ら仲間たちのあいだへ拡散して行き、うすめられて生気を失
い、そのあぐく彼が公衆便所の汚れたコンクリート床へ殴りた
おした、中年男のズボンをすりさげた死体は彼の記憶だけの所

有ではなくなり、僕らみんなをおおうねっとりして動きのない
 一様なよどみへ吸いこまれてしまっている。その時、彼はす
 でに僕らとすべてを共有し、なにひとつ新しいものをひとりじめ
 していかないことに自分で気がついているのだ。そして僕らはも
 う新入りではなくなった彼の周りをとりまかない。(傍線論者)

③翌朝、食事まえの短い時間に、不眠のために眼を充血させた僕
 らへ彼が語ったところによると、彼は自分のセクスをあざけつ
 た娼婦の厚く脂肪のまわった腹をナイフで刺し、すさまじく血
 をふく薔薇のような傷をつくったのだ。その夜から僕らはみん
 な、よく肥えた娼婦とその白い腹の薔薇に似た傷口を夢のなか
 で共有することになり、やがてそれは喉にからみ胸をふさぐ悪
 夢の濃密さを失い、娼婦の冷たい裸の腿に足をからまれたこと
 のない者にさえ充実した快楽をもたらす夢にかわっていった。
 しばらくするうちにそれは軽快な情事のようなものになり、そ
 れが少年院の広い共同室にゆきわたったところには、その少年も
 ふくめて誰一人そのつめに汗をかいて震える者はいなくなつて
 しまう。(傍線論者)

④僕らの中から、ただかつて悪夢に呻いたという特徴だけでその
 新入りを見つけ出すことはとうていできない。その新入り自身
 すら、他のやはりあさぎいろの服を着込み、あさぎいろと藍の
 帽子をかぶった少年たちの緊密な輪から自分だけ切りはなし脱
 け出ることができるなどとは思ってもみないで、昼のほとりの
 残る壁に背をもたせ片頬だけをミツバチの羽のきらめきのよう
 な淡い彩に満ちた湧きたつ夕べの陽ざしにさらして十分な安息
 のなかで佇んでいることだろう。(傍線論者)

引用①と②は、「少年院」の中に「新入り」が入ってきた際の、
 「僕ら」と「新入り」の関わり場面である。「少年院」の「外部」
 から入ってきた「新入り」は、「僕ら」という集団の中で異物的存
 在として認識されている。この場面では、その「新入り」の少年が
 「自分を臆病な孤立へおとし入れてしまいたいように思える苛立たしい
 危惧におそわれ」、自らの「少年院」へ入れられる原因となった「罪」
 を、自身を取り囲んでいる「僕ら」に語る。そしてこの「新入り」
 の少年の話した「罪」を、「僕ら」、すなわち少年たちが聞き、その
 「記憶」を彼らが共有することで、「新入り」の「罪」は「僕ら」と
 いう集団のものとなり、彼個人のものではなくなる。それによつて
 初めて「新入り」の少年は、自身が②の傍線部のように「僕らとす
 べてを共有し、なにひとつ新しいものをひとりじめしていかない」と、
 自らが「新入り」という個人としてではなく「僕ら」という共同体
 の一員になったと認識することで、話を止めるのだ。

また引用③では、共同体の一人である少年が、ある時自身を「自
 分のセクスをあざけた娼婦の厚く脂肪のまわった腹をナイフで刺
 し、すさまじく血をふく薔薇のような傷をつくった」という悪夢を
 周りの少年達に語るることによつて、「僕ら」は③の傍線部である「肥
 えた娼婦とその白い腹の薔薇に似た傷口を夢のなかで共有するこ
 と」になる。それによつて「少年院」ではその一人の少年が見た悪
 夢は「充実した快楽をもたらす夢」として共同体のものに変化する。
 つまり〈個人の意識〉であるその少年の夢は「僕ら」という集団の
 ものとして吸収され、埋没していくのである。「僕ら」という共同
 体を形成する少年達は、「僕ら」の一員として傍線部④の「あさぎ
 いろの服を着込み、あさぎいろと藍の帽子をかぶった少年たちの緊

密な輪」という連帯感を抱くことで、「外部」から管理され、少年達だけが持つ記憶を共有することで、個人としての自己が埋没されていくのである。

また「僕」は、「僕ら」という共同体が持つ「罪」の意識を次のように語る。

僕らは特に兇悪な者たちをかくりするために作られた仮の分院にいたのだから、院長や猛々しい教官たちがくりかえし説得しようとするように、おそらく眼に見えない《罪》の絨毛で躰の表面はおろか、内臓の隅々まで覆いつくされていたのかもしれない。しかし僕らは、自分のズボン、自分の靴というふうには自分の《罪》をしつかり自分の財産として持っているという気持ちにならなかつた。そのかわりに罰だけが僕らに群れをなしておそいかかり、僕らをくるみこんで外部から隔絶させていたのだつた。

(傍線論者)

つまり、「僕」にとって共同体を構成する少年たちの持つ「罪」は、個人のものではなく、「僕ら」という集団の意識の一つとして認識されているのである。だからこそ「僕」は、「僕ら」が傍線部のように「自分の《罪》をしつかり自分の財産として持っている」という気持ちにならなかつた」と語るのだ。少年たちは自身の持つ「罪」を語り、「僕ら」という集団の持つものとして共有することで、本来なら彼らが個として各々が背負うはずの「罪」の重さから逃れられているのである。

そしてこの集団意識の性質は、物語中少年達の間で流行した「あそび」、すなわち少年たちが自ら殺した小動物を「少年院」の壁に吊るすといった行動にも表れていると言える。

僕は最初そのあそびから離れている少数者の一人だつたのだが、やがて苛立ちながら作業場の隅や床の下や廃品入れの奥などを探し回っている自分に気づくのだつた。それは根深い、長期にわたって威をふるう伝染病のようなものだつたのだ。

(傍線論者)

この「僕」が、作中「根深い、長期にわたって威をふるう伝染病のようなもの」や、「集団的な狂気の一つ」と語る「あそび」は、少年たち個人のものではなく、少年達の共同体の持つものであり、その吊るされた小動物の優劣によって、共同体の中の「微妙な位階制度が揺れ動く」ことになる。そしてこの共同体に帰属する「僕」は、自然に「僕ら」の一員として行動することになる。それは「僕ら」の間に流行した「まったく熱中してその重々しく荘重な、しかもふざけていて残酷なあそび」に対して、傍線部で「僕は最初そのあそびから離れている少数者の一人だつたのだが、やがて苛立ちながら作業場の隅や床の下や廃品入れの奥などを探し回っている自分に気づくのだつた」と語ることから明らかである。「僕」自身もまた、「最初そのあそびから離れている少数者の一人」という、「僕ら」の中で異質な存在でありながらも、「少年院」の中で少年たちと流行しているその「あそび」に引き込まれ、共同体の一人として行動しているのである。

しかしこの「僕ら」の内部で起こつた「あそび」に、主要登場人物の一人であり、「僕ら」の一員ではない「外」に属する「院長の養子」の少年が介入する。「僕ら」によって「混血」と呼ばれた彼が、自身で捕らえた「二十日鼠」を、「僕ら」が「少年院」の壁に小動物の死骸を吊るしたことに同じように、「院長の住宅側の壁」に吊

るし、「僕ら」の「あそび」に参加する。言い換えれば、この時この少年は、彼自身が「少年院」を管理する側の共同体に属していながらも、「僕」の属する「僕ら」の中に異物として入りこむのである。この物語はまさに、「院長の養子」、つまり少年達から見た「外部」に属する人物が、「僕ら」という共同体の内部に介入することで進んでいくのである。

三 「混血」と「僕」

(一)「混血」と呼ばれた少年

「僕」は作中「僕ら」によつて「混血」と呼ばれた「院長の養子」の少年について次のように語る。

①ただ僕らは、光のかげんで淡い空色に光る眼と、うすく切つた肉のように赤い皮膚をした、院長の養子、彼を僕はごく秘密に《混血》と呼んでいたのだが、その僕らと同年輩の少年をすっかり無視することはできなかった。中庭を院長宿舎から仕切つている厚い羽目板の小さい眼のような節穴から、僕らはよく向う側を覗いて見るのだった。(中略)僕は、中学校へ熱心に通つているその可愛い少年、僕らにくらべると天使的に純潔な混血児を好意的に軽蔑していたのだ。

②「それほどでもないさ」と僕は肩をたれて二十日鼠を庭の隅にうずめようとしている院長の養子に軽い親しみと愛を感じながら弁護した。「二十日鼠だつてトカゲくらいにはちゃんとしてるよ」「お前なんか何を吊るしたというんだ」と海員の《女》は怒りに燃えて僕に食い下がった。「キリギリス一匹、吊るし

たか?」僕も不意の怒りから頬の震えを歯を噛みしめて耐えながら彼を睨みつけた。「悔しかつたら地虫でも掘れ」と《女》はいった。「南京虫でもひろつて来い」彼の息づく喉へとびかかろうとする僕を、《女》の情夫の海員の逞しい腕が横からつきはなした。僕は地面に腹ばいに倒れ、怒りくるつていた。明日の夜明けまでに俺が何を吊るすかよく見ている、と僕は鉢を燃え上がらせながら考えた。(傍線論者)

③情事のあとのセクスのように力なく縮小した鳩の死骸を両手ににぎりしめたまま院長の養子が驚愕に唇を開き、僕に睨みつけられて動くことさえできない。怒りがわきおこつてきて僕の尻や背、首筋を熱くした。僕は喉をからからに乾かせ、混血を睨みつけたまま黙っていた。

④優美な獲物を確保した残酷な喜びに揺りうごかされ、すつかりおちついて僕は教官宿舎のけはいに聞き耳を立てながら木戸を乗り越え、中庭を駆けぬけた。(傍線論者)

「僕ら」は、自分たちと「同年輩の少年」でありながらも「少年院」を管理する側に属している「院長の養子」である少年を、「少年院」と「中庭」の間にある「厚い羽目板の小さい眼のような節穴」を通して覗き見をする。「僕」は「僕ら」の一員としての意識から、彼を「好意的に軽蔑」し、また彼自身がその少年を「可愛い少年、僕らにくらべると天使的に純潔」と表しながらも蔑称である「混血」と呼ぶ。これは「僕」が「混血」の少年に対して個人的に親しみを抱きながらも、その少年が自身の属する共同体ではない、「外部」に属する人物であるという、「僕ら」の立場から見た彼に対する差別意識によるものである。「僕」はあくまで彼を共同体への帰属意

識から語るが、「院長の養子」である少年が共同体の内部で発生した「あそび」に介入することによって、「僕」の彼に対する認識が「僕ら」という立場から「僕」個人のものとして変化していく。

②は、「二十日鼠」を壁に吊るした「院長の養子」を、共同体の一員である「海員の情婦」の少年が「くだらないやつだな」と馬鹿にし、それに対して「僕」自身が「院長の養子」に対して抱く「軽い親しみと愛」から彼を庇うことによって、二人が対立する場面である。ここで初めて「僕」は「僕ら」の一員という立場ではなく、②の傍線部のように「僕」個人の立場から「明日の夜明けまでに俺が何を吊るすかよく見ている、と僕は軀を燃え上がらせながら考え」、行動する。「僕」は②の場面の後の夜に、彼自ら「少年院」の規則を破り、一人で獲物を探しに行くのである。

そして「僕」は引用③の場面で獲物を探して中庭に出た際、「院長の養子」が鳩を絞殺する姿を目撃する。「僕ら」の「あそび」に再び介入しようとした「院長の養子」に怒りを覚えた「僕」は、彼を追いつめる。そして④の傍線部で「僕」に「優美な獲物」と表された「院長の養子」は、誤って「少年院」の「外」の河に落ちてしまふ。それに気が付いた「僕」は彼を助けようと自らも河に飛び込み、二人は「僕」の叫び声に気づき駆け付けた夜勤中の「清掃事務所の雑役夫」によって引き上げられることになる。次に「医務室」で目覚めた「僕」は、「院長の養子」が河に落ちた原因が「僕」自身であるにも関わらず、「僕」が彼を助けようとした「勇敢な少年」として、「院長」や「看護婦」そして「教官」といった「僕ら」の「外部」に位置する人々から称賛を受けることになる。

①「お前が早く家に帰れるように手配しようとしているんだが、

お前のお母さんからは引き取りに来るといふ連絡がないんだ。お前は今度のことで家へ帰れる資格が十分に認められているんだぞな」
(傍線論者)

②あいつは今、意識不明で寝ているだろう、そして意識を回復した時、あいつは僕のしつこい追跡を養父たちにつげるだろう。院長や教官たち、それに新聞記者や看護婦たちまでが、たちまち怒り狂って僕を病室から引きずり出しに来ることを僕は深い不安に軀をこわばらせ、なかば絶望して待っていたのだ。僕によせられる期待と誤解からの賞賛、そしてそのすべてにうらぎられたことを知ってからの大人たちの残酷さ、それが少年院へ入れられるまで僕の生活でくりかえされた僕には責任のない劇なのだったから、僕は不意打ちをくうおそれはなかった。しかしいつもそれに立ち向かうことが容易ではなかったのだ。特に病室のベッドへ横たわっている僕をおそうそれへの予想は下腹部のあたりを濡らす結果をよびおこすほど僕をふるえあがらせるのだった。
(傍線論者)

引用①と②から、本来「外部」の人々から罰せられる存在である「僕」が、今度はその「外部」の人々が「院長の養子」を救ったという、「僕」に与える称賛によって、彼の「罪」が許されているのである。つまりここで一度、「僕」は少年達の共同体から脱け出たことになるのである。

また「僕」は「院長の養子」が「僕」の行いを「養父」である「院長」へ告げ、引用②の傍線部のように「院長や教官たち、それに新聞記者や看護婦たちまでが、たちまち怒り狂って僕を病室から引きずり出しに来ること」を絶望しながら待つ。ここで「僕」が絶望的

に恐れているのは、「僕」が「院長の養子」を追いつめたという自身の行動に対する罪悪感よりも、その行動が発覚し、傍線部の「僕」によせられる期待と誤解からの賞賛、そしてそのすべてにうらぎられたことを知ってから大人の残酷さ、つまり「僕」が「罰」として「僕」の属する社会の人々から受ける暴力なのである。

小森陽一氏は「芽むしり 仔撃ち」——差別と排除の言説システムの中で暴力について次のように述べている。

暴力は、常に弱いものにむかつてふるわれる。その社会的、かつ身体的に差別化された弱い者の側は、それを回避するか逃げるしかない。しかし、最も弱い者は、致命的な暴力をふるわれて殺されてしまう。そして、その死は、あたかも「村」という共同体を成り立たせるための、生け贄のように象徴されていく。^(註)

(傍線論者)

差別を受ける少年院という共同体に属していることに加え、身体的にも弱者である「僕」は、社会から暴力を受ける存在として自己を内面化している。そのため「僕」は「大人たちの残酷さ」つまり自身に降りかかろうとする暴力を回避することなく、恐れ絶望しながら待つことで受け入れているのだ。

またこれと同時に「僕」は、この事件を聞きつけた「少年院」の仲間の少年たちからも英雄視される。

仲間たちは僕をかこみ、黙ったまま僕を見つめた。彼らの眼は淡い羞じらいに溶かされる一種の畏敬と、それよりもなお淡い陽気な感情をたたえて、僕をめずらしがっているのだった。僕は自分が新入りのようにあつかわれるのを感じ、そして新入りのすべてがそうするように自分の悪事を語りたい衝動におそわ

れた。

「僕」は共同体の仲間たちから「淡い羞じらいに溶かされる一種の畏敬と、それよりもなお淡い陽気な感情」で見られており、ここで「僕」が「僕ら」である少年達からも異質な存在として認識されているのがわかる。それによって「自分が新入りのようにあつかわれる」ように感じた「僕」は、自身も「少年院」の「外」から「僕ら」のもとにやってきた「新入り」として、その共同体と「罪」を共有するための「自分の悪意を語りたい衝動」に襲われるのである。

(二) 自分だけの罪を背負った「僕」

「僕」が「院長の養子」の存在をきっかけに「僕ら」から一度抜け出したことにより、「僕」の抱く「罪」の意識が変化する。

僕の胸のなかで、生まれてはじめて灼けつくかたまり、おそらくは僕らが数々の雄振れをいくつもの季節にわたって、壁の内側に眼をさまよわせて探しつづけた《罪》の意識が着実なやどりをしてしまったように思われるのだ。^(註)

(傍線論者)

「僕」は傍線部のように「僕の内側に眼をさまよわせて探しつづけた《罪》の意識が着実なやどりをしてしまったように思われるのだ」と語り、本来個人の「罪」の意識を持たない少年達の共同体から異質な存在としてあり続けている。これは「僕」が「僕ら」という集団の持つ「罪」としてではなく、「僕」という個人が持つ「罪」として捉えているためである。

また「僕」は、「院長の養子」と河に落ちる以前は「情婦になるほどの優しい首筋を持たない者たち」の一人であり、「少年院」の中で影響力を持たない存在だったが、この事件を機に、仲間たちが

らも英雄視されることによって、自身が「僕ら」の中で「実力をふるう兄貴株の一人」になると感じる。しかしその後他の兄貴株をけん制するために「僕」を利用しようとした「兄貴株」の一人である「海員」と性的な関係を結ぶことで、彼の肉体的な支配を受ける代わりに庇護される存在である「情婦の少年」へと立場が変化する。

「今夜からお前の毛布は俺が確保してやる」と海員がむしろ他の仲間たちに聞かせるためにいった。(中略)その夜、海員は外国の慈善団体から送られた最も上質の毛布を僕と彼自身のために運んできた。そして、その行為を通じて彼の新しい情婦であることを宣言された僕は、海員の硬い躰にだきしめられて、ふかふかした毛布にくるまることになるのだった。それから海員の熱した鉄のセクス、耳たぶにふれるあたたかくせつかちなあえぎと裸の脇腹にしたたる汗が僕のまわりの小さい夜をみたした。

引用の場面で、「海員」が「僕」のために「最も上質の毛布」を運んだことで、「僕」はその行為を通じて彼の新しい情婦であることを宣言されることになる。つまり「僕」が女性化されることで「僕ら」の中での立場が変化したことが「僕」だけでなく他の少年たちにも示されることになる。「僕」は本来「情婦になるほどの優しい首筋を持たない者」、つまり身体的に「情婦」としてなりえない存在でありながら、「院長の養子」を救ったという「外部」の情報によって、共同体の中で立場が変化するのである。

そして「僕」は「すでに自分でひきおこした関心の波が仲間たちのあいだで静まりはじめ、日常的な大きい《弛緩》の中へ没しさううとして知っているのを知った」と語り、「僕」の起こした「院長の養子」

との事件は、「僕ら」の中で既に少年たちの記憶として共有され、埋没した事に気が付くのだ。結局「僕」は、共同体から「海員の女」として認識され、「僕ら」の中に再度組み込まれているのである。

①そして一週間もたつと、そのあとに残ったことといえば、僕がすっかり海員の《女》になってしまったということだけだった。

しかし、僕は仲間たちの中にはその《弛緩》の中へもぐりこめないのだ。僕の胸の中で燃えあがるかたまりが、いつも僕を
とらえていて息苦しくするのだった。(傍線論者)

②そして僕は混血が僕のやったことをあばくために戻ってくることを、今はむしろおそれよりも、激しい期待の感情で待っていると、今ほむしろおそれよりも、ほんとうに僕は、混血が、僕への復讐に退院するのを待ちこがれていたのだ。

しかし「僕」は、自身が「海員の女」としての立場になった後も、傍線部のように「胸の中で燃えあがるかたまり」である「罪」の意識を持ち続け、それによって「僕ら」の中にある異物である自分に「息苦しく」感じている。「僕」の「院長の養子」へ抱いた「罪」の認識は、やがて「僕」のその「罪」に対する贖罪行為へと発展していく。

①教官宿舍脇の木戸が開き、子供を中にした二人の大人が中庭へ入った。子供が白く光る環をいくつかはめこんだ松葉杖をしっかりと両脇に抱え込んで、小さいせむしのように躰をまるめ顎を突き出してゆっくり歩くのを見て僕は激しい恐慌にとらえられた。(傍線論者)

②僕は自分の頬の筋肉がこわばると、混血の眼に感情の小さい火のようなきらめきが始まるとを同時に感じた。「お礼をいい

なさい」と院長が混血にいった。僕は軀をかたくした。混血の眼が夕暮れた空の茜色をうつして熱情的なきらめきをもえあがらせるのが僕には恐かった。「ありがとう」と混血が喉にからんだ声でいった。驚きが僕の皮膚のすみずみまで、砂糖の塊を融かす熱湯のように勢いよくしみわたった。僕は弾かれるように彼らへ背をむけると、壁にそい殆ど駆けてのがれた。僕はどうしていいかわからなかったのだ、混血まで自分の追いかけてきた壁の下で僕にありがとうという…(中略)彼は群がってゆっくり近づいて来ようとする僕の仲間たちをすばやくぬすみ見ると哀願する声を出した。「ねえ、鳩のことは黙っていて」僕はぼうぜんとして混血の青ざめて小さい顔を見おろした。「頼むから」と混血はますます粘つく声でくりかえした。「鳩のことは黙っていて。僕の足はこんなになったんだ、罰はもううけたんだから」

「僕」は、当初「院長の養子」に自分の「罪」を暴かれることを恐れていたにも関わらず、「僕への復讐に退院するのを待ちこがれていたのだ」と語り、自らの罪を暴き罰せられることを望む。引用①と②は「僕」が事件の後、初めて「院長の養子」と再会する場面である。

「僕」は「院長の養子」の変わり果てた「小さいせむしのように軀をまるめ顎を突き出してゆっくり歩く」姿に「激しい恐慌」を感じている。これは、「僕」が「僕ら」としてではなく、「僕」自身が「院長の養子」に対して犯してしまった「罪」の重さを感じたからである。

また「院長の養子」にお礼を言われ困惑する「僕」に畳み掛ける

ように、②の傍線部の彼の言った「鳩のことは黙っていて。僕の足はこんなになったんだ、罰はもう受けたんだから」という言葉から、「院長の養子」と「僕」の抱く「罪」の認識のズレが明らかに。「院長の養子」は、あくまで自身が鳩を殺したことに對する罪悪感を抱え、自身の足の骨折がそれへの「罰」であると認識しているのである。「院長の養子」からしてみれば、「僕」の存在は、彼自身が犯した「罪」に對する目撃者であり、彼の「罪」を暴くことのできる証人なのである。つまり「院長の養子」は、「僕」が初め彼に對して密告されることを危惧したことと同じように、彼自身もまた、「僕」が彼の「罪」である鳩の絞殺を周囲に公表されることを恐れていたのである。だからこそ「院長の養子」は、「僕」を責めるどころか「鳩のことは黙っていて」と「僕」に念を押ししたのだ。この「院長の養子」の姿が、自身の持つ罪によって罰せられた分身として「僕」にうつるのである。

そして「僕」の「院長の養子」への「罪」に對する償いを求める意識が表れているのが次の引用である。

① あいつまでが僕を咎めようとしなければ、僕は誰から罰せられるのだろう、と僕はくりかえし考えた。(傍線論者)

② 僕をほんとうに罰するものがない。僕は軀の底から震える歯をかみ鳴らした。僕はいままで、かざしれない罰の枠にかこまれてくらし、その枠の中でじっと《弛緩》していればよかった。枠の外に正常な社会は確固として存在していた。ところが今となっては、あらゆる堅固な枠組みが崩れてしまったと思われのだ。僕は自分の《罪》をせおいこんだまま突然見すてられ、ひとりぼっちで投げ出されている。この胸をしめつ

ける不安をどうすればいいのだろう。僕は犬のように身震いし海員の重い腕をはずして立ち上がるとあざぎいろのズボンをやつくりはいた。(中略) 僕がその罰の枠組みを造らなければならぬという考えが僕を急激にみだしてゆくのだった。

(傍線論者)

引用①の傍線部で「あいつまでが僕を咎めようとしないうのなら、僕は誰から罰せられるのだろう」と語る「僕」は、自分が「院長の養子」へ抱く「罪」の意識に対して、他者から「罰」を受けることを求めていることがわかる。「僕ら」が本来他者から「罰」を与えられる存在であるがゆえに、その一員である「僕」は、自身の「罪」が誰からも咎められないことに対して不安に陥るのだ。だからこそ引用②の傍線部で「僕は自分の《罪》をせおいこんだまま突然見すてられ、ひとりぼっちで投げ出されている。この胸をしめつける不安をどうすればいいのだろう」と語るのである。「僕はいままで、かざしれない罰の枠にかまれてくらししてき、その枠の中でじっと《弛緩》していればいいのだった」という言葉は、所属する少年たちが「罪」と「罰」を共有し、個人が背負うはずの罪の重圧から逃れられる「僕ら」という集団に対する帰属意識の表れであると考えられる。しかし「僕」は「海員」の「女」として彼に抱かれながらも、「僕」の「院長の養子」への「罪」に対して、自身で「罰の枠組み」を作り、自らを罰することによって償うことを考える。つまり「僕」は、「僕ら」への帰属意識を抱きながらも、同時に自身を罰しようと考ええることで、自ら「僕ら」という集団に反発するという、相反した意識を持つことになるのである。

僕は首を横に振った。そういうことを自分に許すことはできな

い。(中略) 僕は仲間たちの沈黙に支えられ、ふくらはぎの傷の痛みにすすりなきながら、再び壁の上から飛びおり、こんどこそ足の骨をうまく砕くために冷たくざらざらした壁肌をよじ登って行った。

(傍線論者)

そして「僕」は「少年院」の「壁」の頂上にある「有刺鉄線のはざま」の上に立ち、自身の足を「院長の養子」と同じく「不具」にするため飛び降りる。しかし「僕」は足を折ることができず、それどころか偶然にも「少年院」の「外」に出てしまう。その「僕」の姿に対して「逃げる」という「海員」に、「僕」は傍線部のように「そういうことを自分に許すことはできない」として、共同体の一員である彼の言葉を否定する。「僕」は自らの贖罪行為を遂行する意思の下、「こんどこそ足の骨をうまく砕くため」、再び「少年院」に戻るのである。「僕」は自身を罰する方法として、あくまで自身の足を骨折させることに固執する。つまり「僕」は河に落ちた後の「院長の養子」の姿、言い換えれば自身の罪を認識し罰を受けた彼の姿を模倣することで「僕ら」から抜け出ようとしているのだ。

また「僕」は、「院長の養子」への償いのため飛び降りた際、自身を「翼を撃たれ空の高みから沈みこんで来る鳥」と表す。これは冒頭で「僕」が「鳥」を「罪」にたとえて語ったことと呼応している。

平均年齢が一四歳の、ほんの子供にしかすぎなかった僕らは、むしろ静かな速度で濃い褐色にそまって行く中庭の土を見おろしながら、鳥撃ちが鳥を探すように、羽をたたんでひそんでいる《罪》を見つけ出そうとするのだった。それらを僕は、自分の軀の髣ひだ、皮膚の上、つめのはざまにさえ探し出そうと

するのだった。

(傍線論者)

「僕」は、「僕ら」を、「鳥撃ち」と表し、その「鳥撃ち」が「鳥を探すように、羽をたたんでひそんでいる《罪》を見つけ出そうとする」と語る。つまりこの時点では、「僕」は「罪」の認識を探しながらも、それを見つけない無存在である少年達の共同体の中に埋没しており、自身の「罪」を見出していない状態である。しかし、「翼を撃たれ空の高みから沈みこんで来る鳥」のように自らの手で自身を罰した「僕」は、明らかに「僕ら」の一員としてではなく、「僕」個人の立場で行動していることがわかる。これはまさに、自身の「罪」の意識と向き合った「僕」の共同体からの逸脱を意味し、同時にこの贖罪行為を行う「僕」自身の姿が、「僕ら」の探し続けていた「罪」の姿をも象徴しているのである。

結論

社会から隔離され、自身と同じ環境にいる少年たちの共同体のもとに、「院長の養子」、つまり元々身体的に限りなく「僕ら」に近い存在でありながら、その共同体の仲間になり得ない人物が「僕」のいる共同体に介入する。そして「僕」はその人物によって共同体と共有できない「僕」自身の「罪」の意識を抱いた結果、「僕ら」から孤立していく。このように「鳩」では、「僕」が自身の属する共同体への帰属意識を持ちながらも、「院長の養子」という第三者の存在を通じて相反する意識を抱くことにより、その共同体から逸脱していくといった、他の大江初期作品に共通する自己の姿が描かれていると言える。

しかしこの作品における「僕」は、自身の「罪」を共同体の中で埋没させることなく「個」として抱え、自ら共同体から逸脱することと激しい痛みを伴いながら成長するのである。その点において「鳩」は、同じ枠組みを持つ大江初期作品における「他人の足」での、最終的に自ら共同体に埋没しながらも他者を拒絶し孤独になる語り手の「僕」や、「芽むしり仔撃ち」での、村人に強制的に疎外され排除される語り手の「僕」とも違い、語り手の「僕」が、自己を処罰することによって、苦しみの中で「個」として集団に抵抗し生きようとする姿を描いた作品ではないだろうか。

註釈

- (註一) 栗原彬「差別の社会理論のために」(一九九六) 弘文堂
 (註二) 小森陽一「芽むしり 仔撃ち」―差別と排除の言説システム―
 『国文学解釈と教材の研究』(一九九七) 学灯社

参考文献目録

《テキスト》

大江健三郎『大江健三郎全作品Ⅰ』

(一九六六年初版・一九七〇年第八刷) 新潮社

《参考文献一覧》

- 大江健三郎『死者の奢り』(一九五八) 文芸春秋
 大江健三郎『厳肅な綱渡り』(一九六五) 文芸春秋
 相原和邦「『芽むしり仔撃ち』論 ―大江健三郎の初期―」

『文学研究』三六号(一九七五) 日本文学研究会
 篠原茂『大江健三郎文学事典』(一九八四) スタジオVIC

桑原丈和「大江健三郎『芽むしり仔撃ち』論——〈自己〉のための戦い
を選んだ「僕」——」『国語国文研究』九二号（一九九二）

北海道大学国語国文学会

栗原彬編「差別の社会理論のために」

『講座 差別の社会学第一巻 差別の社会理論』（一九九六）弘文堂

島村輝編『日本文学研究論文集成四五 大江健三郎』

（一九九八）若草書房

小森陽一「『芽むしり 仔撃ち』——差別と排除の言説システム」

『国文学解釈と教材の研究（一九九七）学灯社